



MOBILE SUIT
MSM-07S

Z'GOK

PRINCIPALITY OF ZEON CHAR'S CUSTOM TYPE
AMPHIBIOUS MOBILE SUIT



ジオン公国軍
水陸両用モビルスーツ
MSM-07S「シャア専用ズゴック」
1/100スケール マスターグレードモデル

MSM-07S Z'GOK

PRINCIPALITY OF ZEON CHAR'S CUSTOM TYPE AMPHIBIOUS MOBILE SUIT

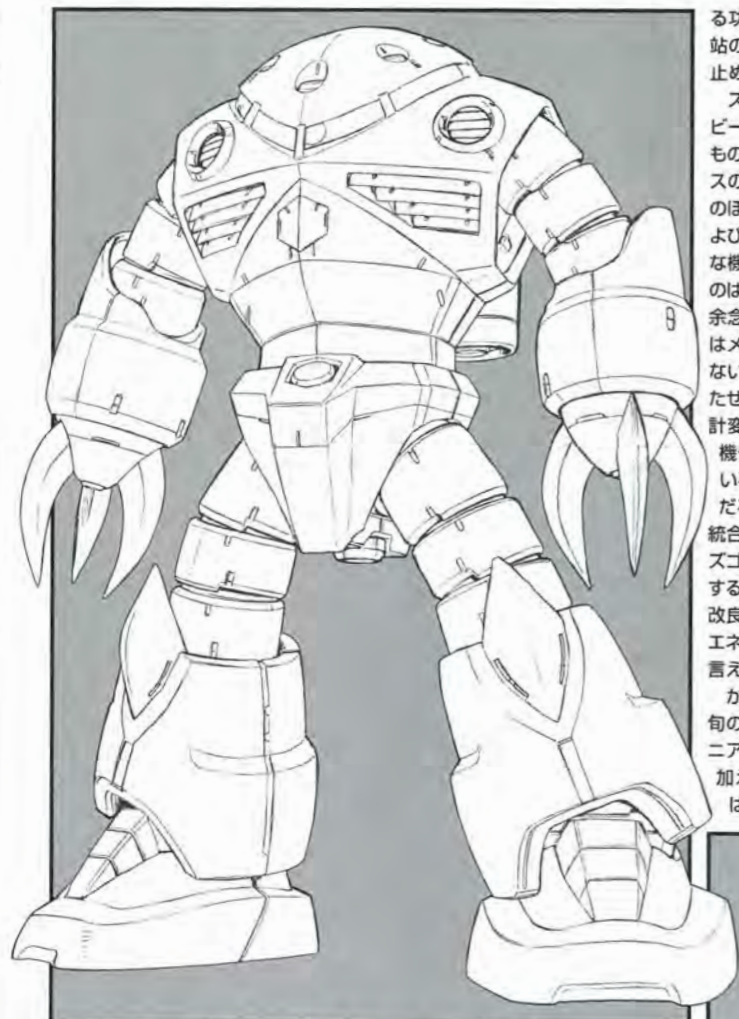


ジオン公国軍
水陸両用モビルスーツ
MSM-07S「シャア専用ズゴック」
1/100スケール マスターグレードモデル

BANDAI 2003 MADE IN JAPAN

0122718





MSM-07S Z'GOK

公国軍における水陸両用MSの開発は、U.C.0079年2月の“地球侵攻作戦”の決定を待って着手された。初期の計画は06系の機体を改修して運用するというものだったが、MS-06M ザクマリンタイプは耐圧や装甲形状などの要素から、実戦に堪え得るものではなかったため、全く新たな観点から水陸両用MSが開発されることとなり、MSMというカテゴリーが作られた。同時に06MはMSM-01と改称され、水密構造や可動部分に使用する部材などのテストヘッドとして使用されることとなった。

公国軍が開発した水陸両用MSは、空間及び陸戦用の標準的な機体と比べ、単純計算で2~3倍のジェネレーター出力を持っている。これは、水冷構造などを取り入れた新たな冷却システムが開発されたことによって可能となったもので、ビーム兵器の搭載も宇宙用、地上用の機体と比べ、比較的早期に達成された。

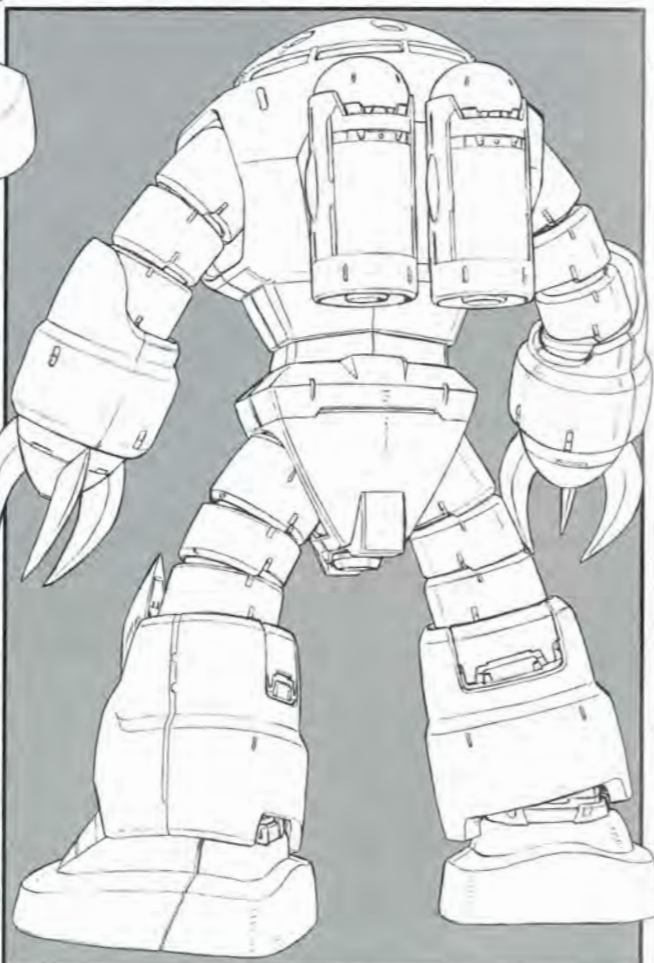
MSM-07 スゴックは、先に完成したMSM-03 ゴッグと比較して長時間の陸上での戦闘を可能としている。スゴックの開発はゴッグの直後に開始されていたが、最終設計にあたってはゴッグの実動データをもとに多くの改良が施されたため、完成はMSM-04 アッグアイなど特殊用途の機体に遅れることとなってしまった。ただし、そのぶん陸戦にも充分対応可能な完成度の高い機体となっており、対MS戦闘においても、パイロットによってはザクを上回る戦績を残している。

スゴックを始めとする水陸両用MSの生産は主にキャリフォルニア・ベースにおいて行われており、連邦軍の勢力圏内にある港湾施設の破壊や制圧、海上輸送路の寸断にも威力を発揮した。機体の多くは各地の潜水艦隊に配備され、強襲作戦や上陸作戦においても多大な戦果をあげている。また、ジャブロー攻略戦における隠密施設の発見や哨戒などにおいても水陸両用MSの果たした役割は大きく、公国軍が制圧地域の支配を維持できたのも、これらの機体によ

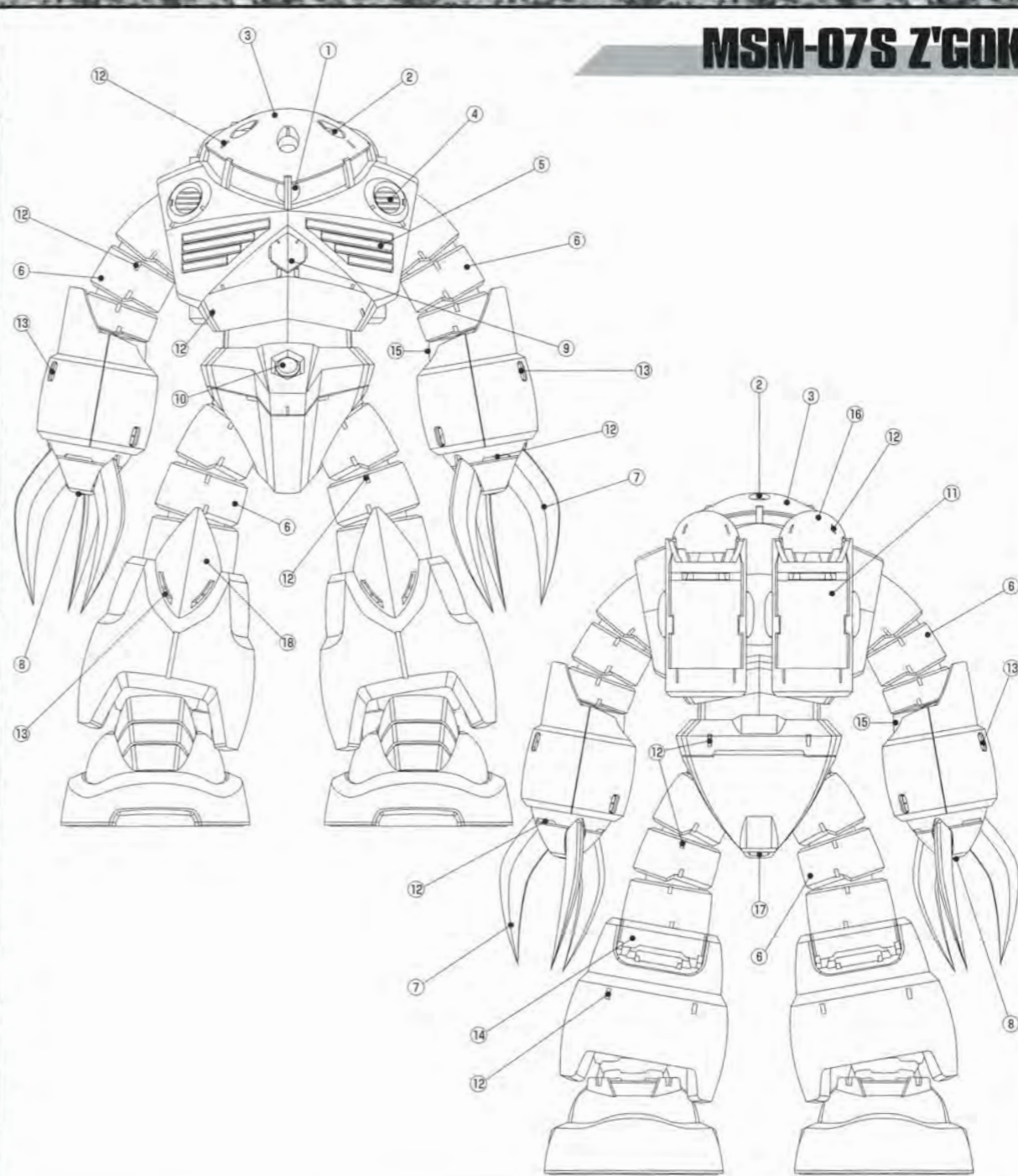
る功績とされている。航空戦力を大幅に損耗した連邦軍は、部隊の移動や兵站のため陸路か海路を多用するしかなかったのだが、それをまさに水際で食い止めていたのが公国軍の水陸両用MSだったのである。

スゴックのスペックは、同時期に連邦軍が開発した量産MSを上回るとされ、ビーム砲やミサイルの標準装備という点を除いても、その格闘能力は目を見張るものがある。特に特殊加工が施されたクローは、熟練者であれば一撃でジムクラスの機体を撃破可能と言われ、また、航行用スラスターをはじめとする機動装備のほとんどは陸上においても使用可能であつたらしく、飛翔するかのような突進および離脱など、対MS格闘時の挙動に貢献している。戦争末期にはさらに高性能な機体もいくつか開発されたが、総合評価においてMSM-07 スゴックを超えるものはほとんどなかった。それは、この機体を実戦投入されてからも、機能向上に余念がなかったからだと言われている。それが公国軍の要請によるものか、あるいはメーカーであるMIP(エム・イー・ピー)の体質などによるものかは判然としないものの、ZIMMAD(ツィマッド)社製のMSM-03 ゴッグは、投入が急がれたせいもあって、初期の改良を除けば、本格的な量産が始まって以降、ほとんど設計変更が施されなかったの比べ、MSM-07 スゴックは、ある程度まとまった機体数がロールアウトすることに細かな調整や改良が施されていたと言われている。無論、そういった改造によって向上するスペックは微々たるものではあつただろうが、それらのトライアンドエラーや技術革新の積み重ねがあつたからこそ、統合整備計画の実施が可能となり、水陸両用MSの究極とも呼ばれるMSM-07E スゴックEの開発も可能となったのであろう。実際、赤く塗装されたことで、存在するのが“シャア専用”機のみと認識されがちなMSM-07Sも、そういった地道な改良の結果生まれた機体であるとされる。外観上の差異はほとんど見られないが、エネルギーCAPシステムの取り回しや機体可動に関しては別の機体であることさえ言えるほどの機能向上を果たしているのである。

かくして“スゴック”系の機体群は、各地で多大な戦果を挙げたが、11月下旬のジャブロー攻略戦への投入以降、12月上旬の連邦軍によるキャリフォルニア・ベースの奪回など、公国軍海上戦力の衰退に伴って活躍の場を失った。加えて、艦船が投降する際に投棄されている場合が多く、戦後に接収、または回収された機体数も決して多くはない。



Conceptual illustration : Katoki Hajime



- | | | | |
|-----------------|-----------------|----------------|--------------|
| ①メインカメラ | ⑥フレキシブル・ペロウズ・リム | ⑪バックパック | ⑯アヘッドセンサーアレイ |
| ②ミサイルハッチ | ⑦アイアンネイル | ⑫フリユイドセンサー | ⑰バーニアスラスター |
| ③センサーアレイドーム | ⑧メガ粒子砲 | ⑬アバフト/グランドセンサー | ⑱ニーアーマー |
| ④ウォーターインテーク/ダクト | ⑨コクピットハッチ/リフト | ⑭ニージョイント | |
| ⑤エアインテーク/ダクト | ⑩マルチプルアクティブセンサー | ⑮エルボージョイント | |

※アバフト=船尾、アヘッド=艦の前方(艦船用語) ※フリユイド=流体

注) この機体は、キャリフォルニア・ベースのMIP工廠において生産された機体内、E型へ移行するラインが転換寸前まで建造していたものである。公国軍の潜水艦を擁する艦隊のうち、特に連邦軍関連の重要施設や拠点攻略を目的とする部隊に多く配備された。水陸両用MSはこの機体によってほぼ完成の域に達したとされる本機の内でも、ジェネレーターや装甲などがさらに改善された、いわゆる強化型に属する機体である。

Parts Name

Parts List

Body Unit

Arm Unit

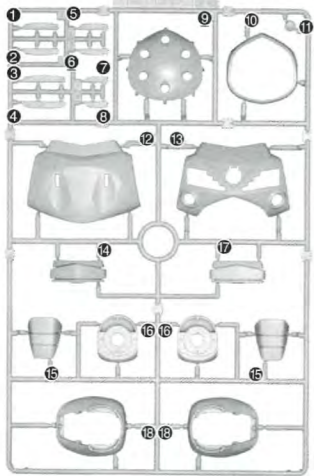
Leg Unit

Back Pack

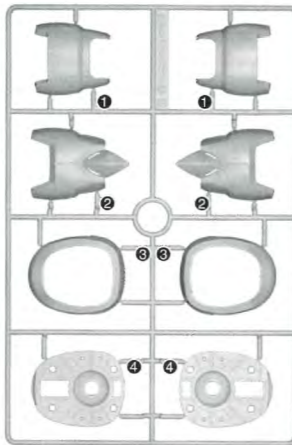
Final Assemble

パーツリスト

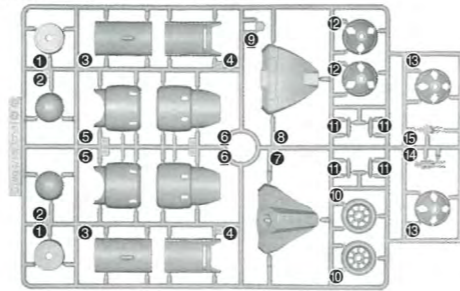
Aパーツ (スチロール樹脂: PS)



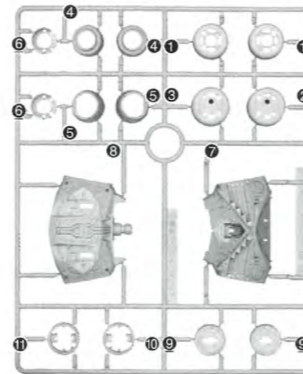
Bパーツ (スチロール樹脂: PS)



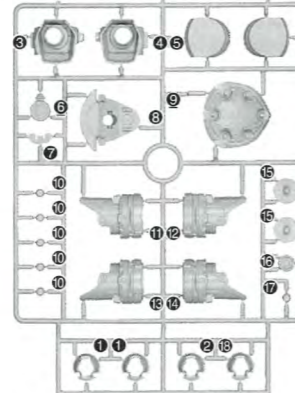
Cパーツ (スチロール樹脂: PS)



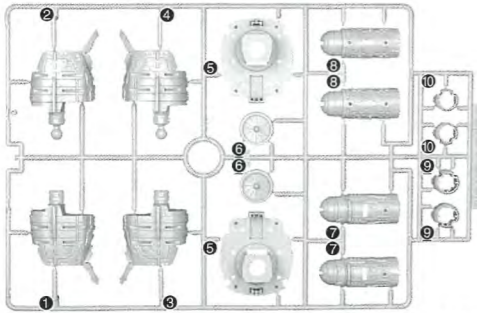
Fパーツ (スチロール樹脂: PS)



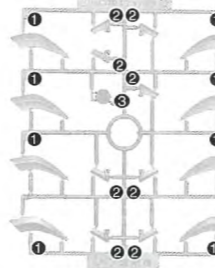
Eパーツ (スチロール樹脂: PS)



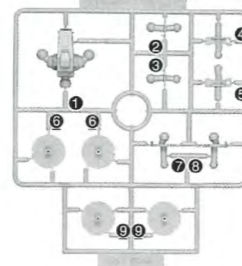
Dパーツ (スチロール樹脂: PS)



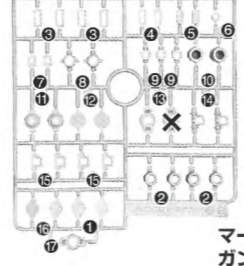
Jパーツ (スチロール樹脂: PS)



Hパーツ (ABS樹脂: ABS)



Iパーツ (ポリエチレン: PE)



Gパーツ (合成ゴム)



マーキングシール..... 1枚
ガンダムデカル..... 1枚

注意

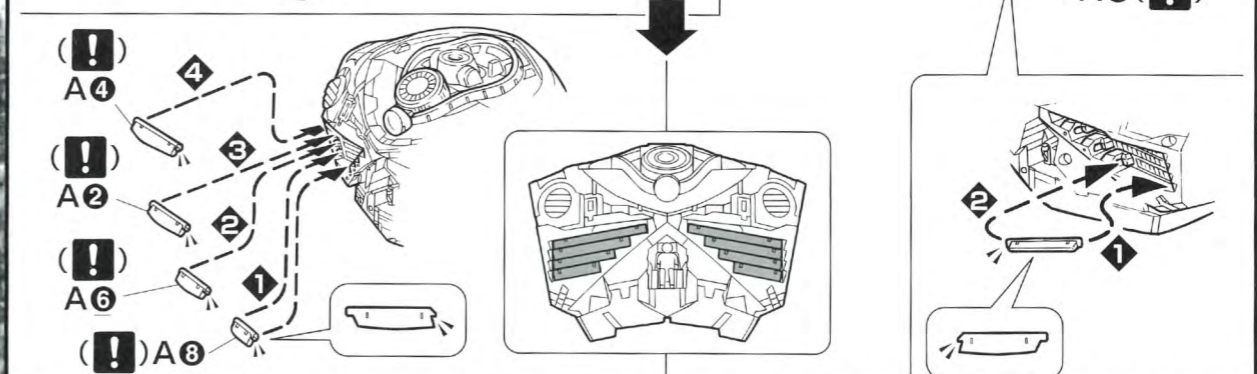
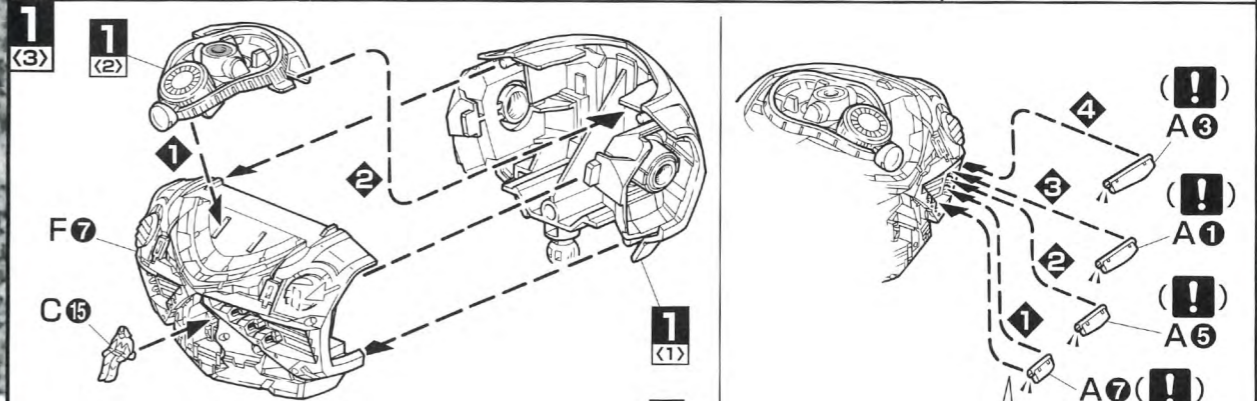
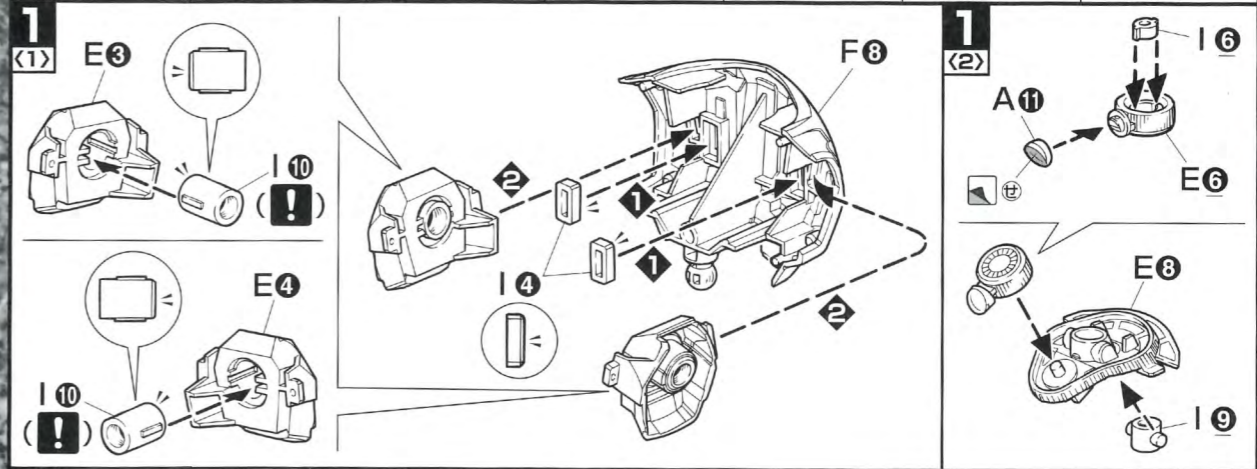
必ずお読みください

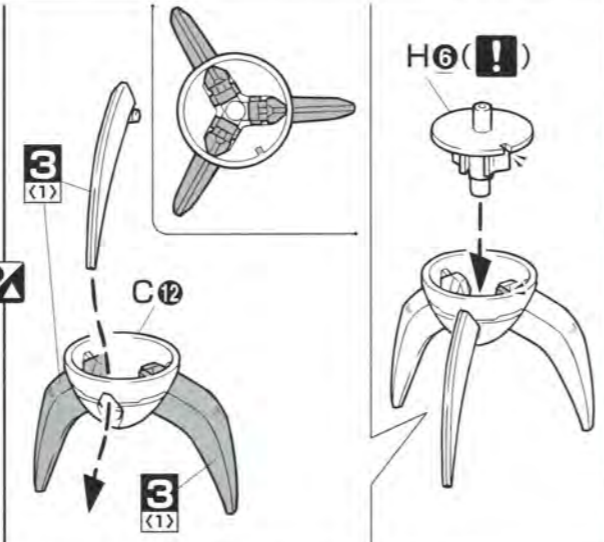
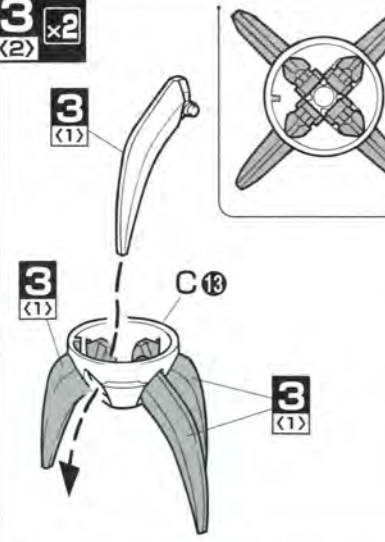
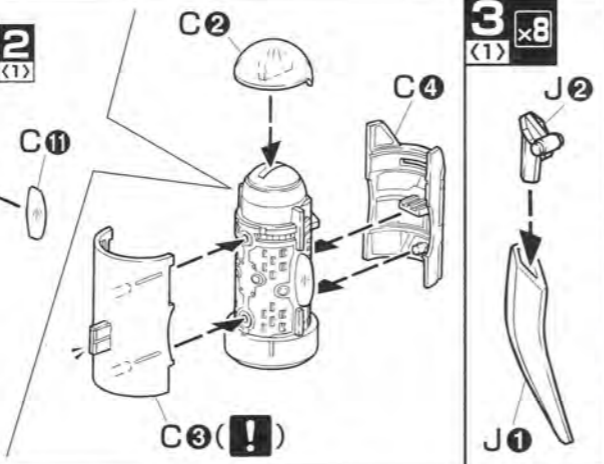
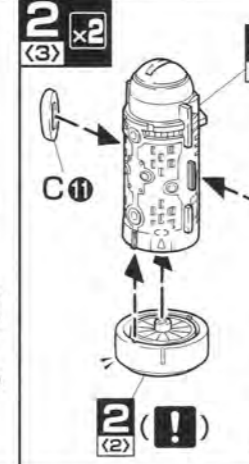
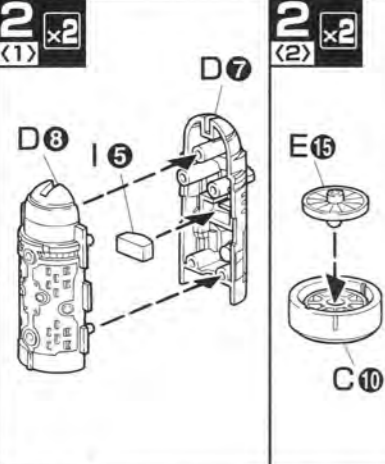
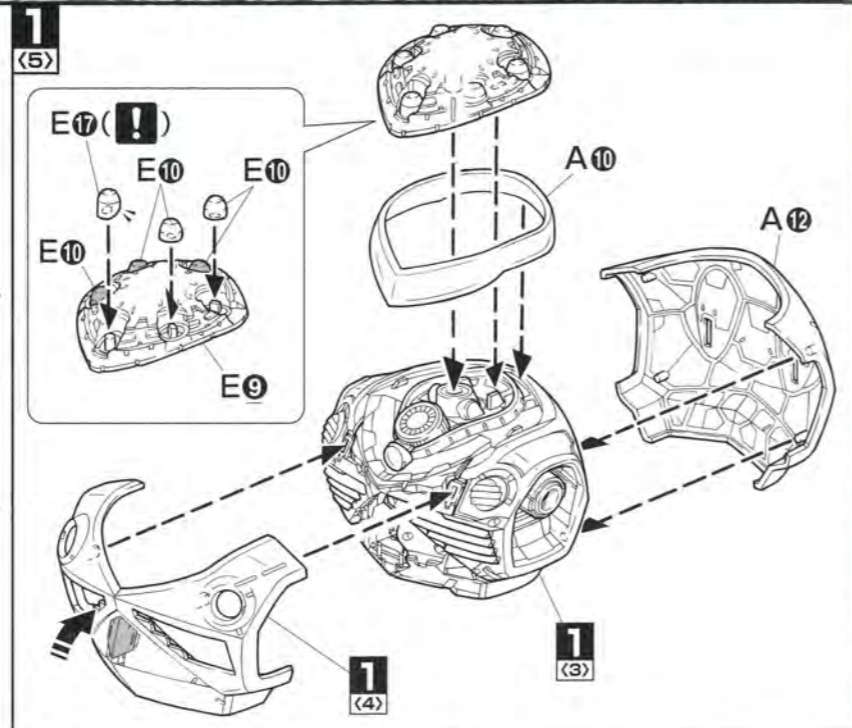
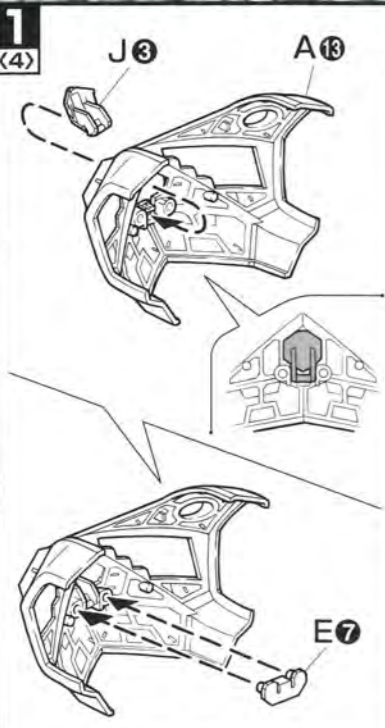
- この商品の対象年齢は15才以上です。〈鋭い部品がありますので、安全上15才未満には通しません。〉
- 小さな部品があります。口の中には絶対に入れないでください。窒息などの危険があります。
- ビニール袋を頭から被ったり、顔を覆ったりしないでください。窒息する恐れがあります。
- 小さなお子様のいるご家庭では、お子様の手の届かないところへ保管し、お子様には絶対に与えないでください。

〈組み立てる時の注意〉

- 組み立てる前に説明書をよく読みましょう。
- 部品は番号を確かめ、ニッパーなどできれいに切り取りましょう。切り取った後のクズは捨ててください。
- 部品の加工の際の刃物、工具、塗料、接着剤などのご使用にあたっては、それぞれの取扱説明書をよく読んで正しく使用してください。
- 部品の中には、やむをえず、とがった所があるものもありますが、気をつけて組み立ててください。
- 塗装にはより安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。

・接着をするところ	・シールの番号	・デカールの番号	・反対側に取り付けるパーツ	・両側と同じパーツを取り付ける	・向きに注意して取り付ける	・ビスの締めすぎに注意
・切り取るところ	・部品を数値の個数作ります	・先に組み立てます	・後に組み立てます	・数値に合わせて回転させます	・どちらかを選んで取り付ける	・反対側も同じように動かします

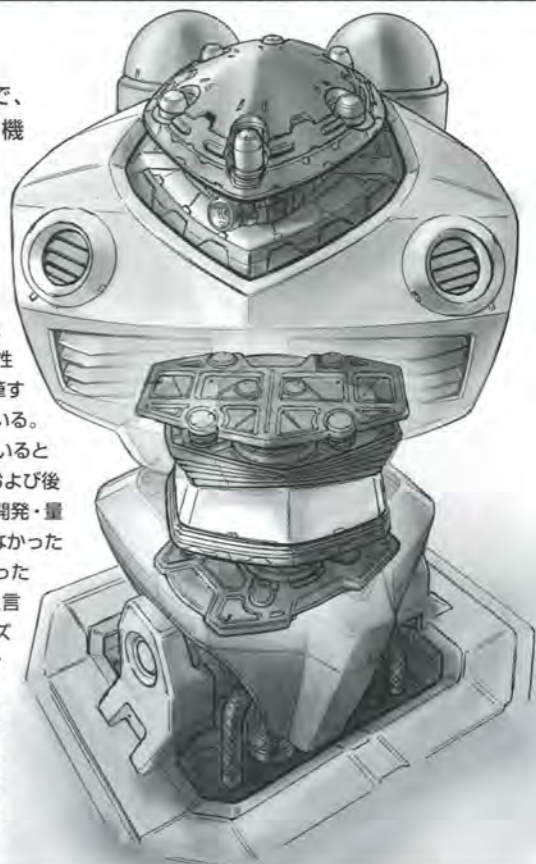




BODY UNIT

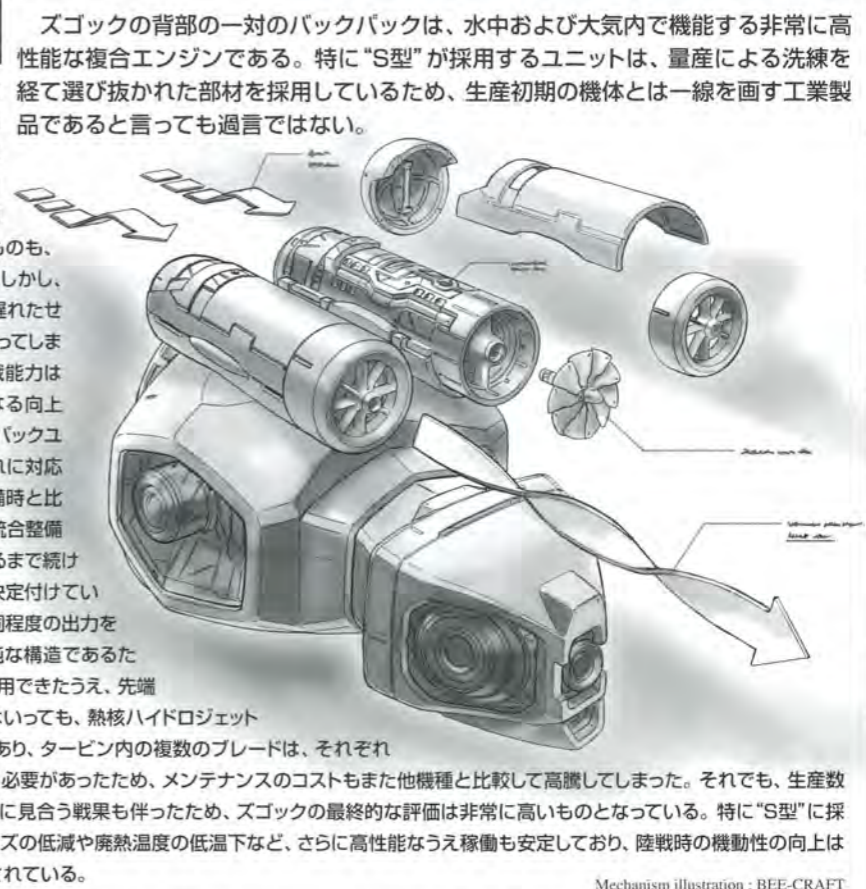
ズゴックのボディユニットは、生産初期から末期に至るまで、度重なる改装を受けていた。特に“S型”に分類される機体は、機体の実戦運用で得られたデータに基づき、運動性や可動範囲などが飛躍的に向上している。

ズゴックをはじめとする水陸両用MSは、冷却機構を水冷式とすることでジェネレーターの高出力化を達成した。それに伴ってビーム兵器のドライブも可能となり、初期の量産機であるゴック以降、ほとんどの機体がメガ粒子砲を内蔵あるいは標準兵装とすることができたのである。加えてズゴックは、他の水陸両用の機体に比べて開発期間が長かったため、内装機関の配置も発展性を見越してあらかじめ整理されており、特にその機動性と運動性の高さは特筆すべきものがある。単に陸戦用MSとして見ても非常に高いスペックを達成している。このことは、MIPが公国軍に於けるMS生産の主流でなかったことが幸いしていると言える向きもある。つまり、ZEOINIC（ジオニック）およびZIMMADは、ザク（および後のゲルググ）やドム（リック・ドムを含む）など、各方面で主力とされるMSの“開発・量産”が最優先課題とされており、水陸両用MSそのものに振り分ける労力が少なかったとする説である。逆に言えば、MIPは、自社開発の機種が決して多くはなかったため、評価の高いズゴックのさらなる高性能化に開発陣の能力を傾注できたと言うわけである。無論、企業規模や公国軍の戦略、思惑などもあっただろうが、ズゴックは生産数の増加に伴って、更なる機能向上を目的とするマイナーチェンジを頻りに繰り返していたことは事実である。ボディブロック形状の見直しもその流れに沿ったものであり、特に腰部、腹部、胸部（頭部）の可動範囲の拡大は同一機種とは思えないほどで、基礎フレームそのものの伸縮や、打突、走行、飛翔（ジャンプ）に連動したタイミングなどを最適化するソフトの同時開発なども相まって、特に“S型”の柔軟さや挙動は、単なる“人型の模倣”のレベルを超えていたという評価も、あながち根拠のないものではない。



BACK PACK

公国軍における水陸両用MSの開発要求においては、機体形状の整流効果そのものも審査の対象となっていた。そのため、ズゴック以前に開発された機体の多くは、何らかの特殊な用途が付加されていない限り、ボディや四肢を含む全体の形状そのものも、航行時には平滑であることが求められた。しかし、ズゴックに求められたスペックは、開発が遅れたせいもあって、結果的に非常に高いものとなってしまった。すなわち、通常のMSと同等の陸戦能力は無論のこと、水中における機動性のさらなる向上である。ズゴックが背部に装備するバックパックユニットはまさにそのためのものであり、それに対応してインテークも増備され、推力は未装備時と比較して単純に倍加している。この構造は、統合整備計画によって生産がズゴックEに転換されるまで続けられ、いわゆる“ズゴック”のシルエットを決定付けている。バックパックは足下の推進ユニットと同程度の出力を持っており、歩行する必要がないぶん単純な構造であるため抵抗も少なく、エンジンの設計もほぼ流用できたうえ、先端部にはセンサー類も増設されている。とはいうまでも、熱核ハイドロジェット/ジェットエンジンの構造は非常に複雑であり、タービン内の複数のブレードは、それぞれフィンとしてもスクリューとしても機能する必要があったため、メンテナンスのコストもまた他機種と比較して高騰してしまった。それでも、生産数が増えるに連れて歩留まりも安定し、それに見合う戦果も伴ったため、ズゴックの最終的な評価は非常に高いものとなっている。特に“S型”に採用されたユニットは、キャビテーションノイズの低減や廃熱温度の低温下など、さらに高性能なうえ稼働も安定しており、陸戦時の機動性の向上は無論のこと、総合的な隠密性なども改善されている。



Mechanism illustration : BEE-CRAFT



協力：ホビージャパン

SNEAK INTO JABURO

U.C.0079年11月30日。ホワイトベースを追跡していたシャアは、連邦軍のジャブロー基地最大の宇宙船ドックの所在を確認した。シャアの報告に基づき、公国軍は連邦軍の総司令部ジャブロー基地を攻略すべく、キャリアフォルニア基地から大部隊を派遣。ジャブロー攻略のため降下作戦を展開した。アマゾン河を遡上し、ソックのセンサーでジャブロー基地への進入路を発見したシャア率いる特務部隊は、アッガイで難なく防衛用トーチカを破壊すると、地下洞窟の間を縫うように走る連絡路に身を潜めながらジャブローの施設に迫る。5機のアッガイと赤いズゴックを駆る特務部隊は、ガンダムのみ生産型であるジムの生産施設に忍び込み、大規模な空襲およびMS降下作戦と運動して、内部から破壊工作を行おうとしていたのだ。コクピットハッチからパイロットが現れ、赤翼と呼ばれるパイロットがシャアに報告する。「シャア大佐！準備できました」「よしっ、行くぞ！」MSを降りたシャアと赤翼ら6人は、それぞれ強力な時限爆弾を大量に携え、ジャブローの施設奥深くへと忍び込んで行った。

A RED MOBILE SUIT

サイド7以降、地上へ降りてオデッサ作戦さえ闘い抜いたホワイトベースは、ジャブローのドックで大規模なオーバーホールを受けていた。ジャブローが襲撃されたのは、まさにその時であった。シャア率いる特務部隊の破壊工作は、ホワイトベースの子供たちの機転で辛くも防ぐことができたものの、公国軍の攻勢は止むことがなかった。ジャブローの防衛部隊は、空襲をいつもの定時爆撃として気にもとめなかったが、ホワイトベースを収容していたブロック周辺にはMSが集中して降下していた。ジャブロー全体からすればわずかな整備区画のひとつに過ぎなかったが、大規模な空襲と同時に基地内部への侵入を許したことは前代未聞であった。整備をしていた作業員たちも防衛に駆り出された。果たして、迎撃に出たアムロの眼前に、赤いズゴックが躍り出てきた。「赤い色のモビルスーツ？シャアじゃないのか……!?」足元の戦車を蹴散らしながら進むズゴックに防衛隊のジムが迫る。ズゴックは身をかかめてジムの攻撃をやり過ごす。次の瞬間にはその爪でジムのボディを深々と貫いていた。「間違いない、奴だ！奴が来たんだ!!」ガンダムを見やりながら、赤いズゴックはゆらりと立ち上がった!!



ACTION POSE



INNER FRAME



BE SKILLFUL AT NORE...GUNDAM!

赤いズゴックめがけ、ガンダムのビーム・ライフルが閃き、その光軸の上を下をかくくってズゴックがガンダムに迫る。「シ、シャアか?!」「さらにできるようになったな、ガンダム!!」激しい攻防の後、ズゴックの放ったビームがガンダムの盾を貫き、ガンダムはそこからさらにビームを撃ち返す。「やるっ!!」シャアは畏怖するとともに、快哉を叫んでもいた。そこに、戦闘用ホバークラフトを駆るウッティ大尉が割り込んできた。「至近距離でミサイルを撃ち込めば!!」「ウッティ大尉、無理です!!」「冗談ではない!!」ズゴックは吐き捨てるようにホバークラフトのコクピットを叩き潰す。しかし、大尉の放ったミサイルはズゴックに一矢報いていた。「バランサーが狂ったのか?!」ガンダムに突撃したズゴックは、その狙いがわずかにずれ、右腕を切り落とされてしまう。「逃がしはしない!!」不利を悟ったシャアはガンダムの脇をすり抜け、アムロはズゴックを追う。「私にプレッシャーを感じさせるパイロットとは、一体何者なんだ!?!」一瞬の遅延の後、地下水脈を発見するや、シャアは追いつくガンダムとの間の洞窟を落着かせて脱出していった。シャアは未だガンダムのパイロットの名を知らない。

PAINTING

※よりリアルに仕上げたい場合は、下の基本色をご確認ください。
 ※塗装には、より安全な「水性塗料」のご使用をおすすめします。
 ●このキットをよりリアルに塗装したい方は、(株)GSIクレオスより発売のガンダムカラーをお使いください。
 ●ABS樹脂部分への塗装は破損する恐れがありますので、塗装はおすすめできません。

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 本体等ピンク部の塗装色。シャインレッド(70%) + ホワイト(30%) + ナイエロー少量 ※またはガンダムカラー ピンク2 腕、足等レッド部の塗装色。レッド(70%) + ホワイト(20%) + ブルー(10%) ※またはガンダムカラー レッド2 ジャバラ、内部メカ等ダークグレー部の塗装色。ミッドナイトブルー(100%) + ホワイト少量 ※またはガンダムカラー ファントムグレー | <ul style="list-style-type: none"> ツメ等ホワイト部の塗装色。ホワイト(100%) ※またはガンダムカラー ホワイト3 頭ミサイル等グレー部の塗装色。ニューラルグレー(90%) + ミディアムブルー(10%) メインカメラ蛍光ピンク部の塗装色。蛍光ピンク(100%) |
|---|---|



▲ 型式番号、注意書き等のマーキングをガンダムデカールやマーキングシールで再現。

▲ 1/100スケールで精巧に作られたシャア・アズナブルのフィギュア付き。

FRONT VIEW



REAR VIEW



▲ シャア専用カスタマイズされた多重関節構造は、量産機に対して大幅にディテールアップし、伸縮機構も追加。



▲ 腕部のアイアンネイルは開閉可能。付け根中央のメガ粒子砲も再現。3本のツメに加え、差替えて4本ツメも再現可能。



▲ 背部バックパックは、カバーが脱着可能。内部はメカディテールを表現。



▲ バックパック、足の底部等には水中推進用のスクリュディテールを再現。

Parts Name

Parts List

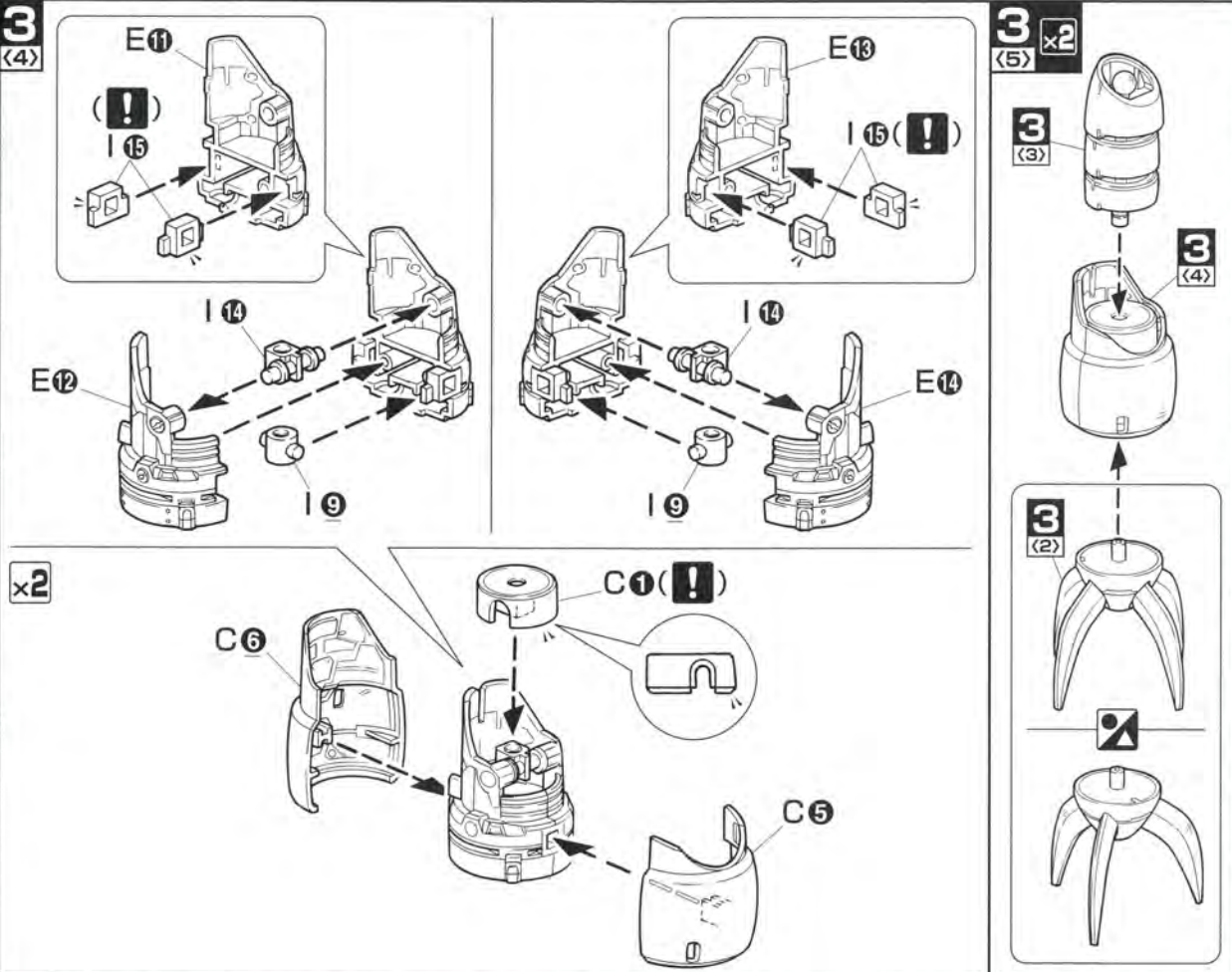
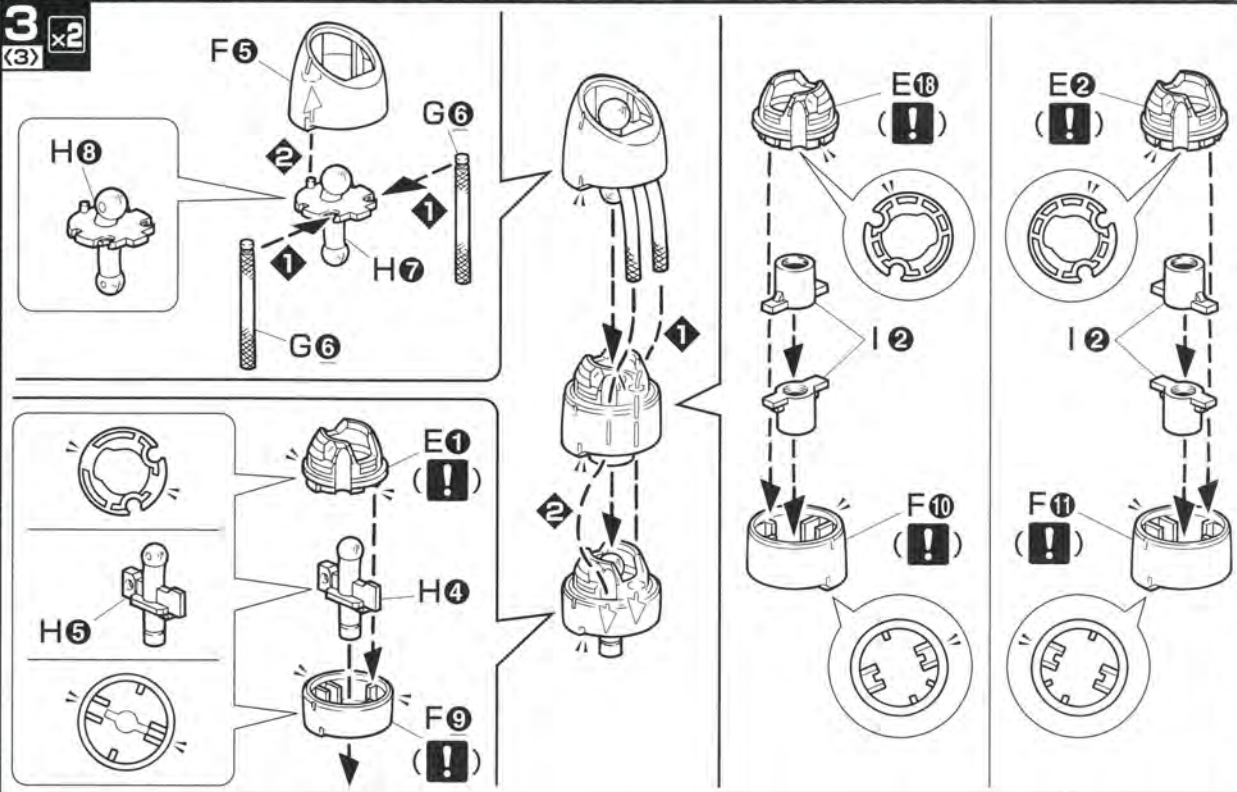
Body Unit

Arm Unit

Leg Unit

Back Pack

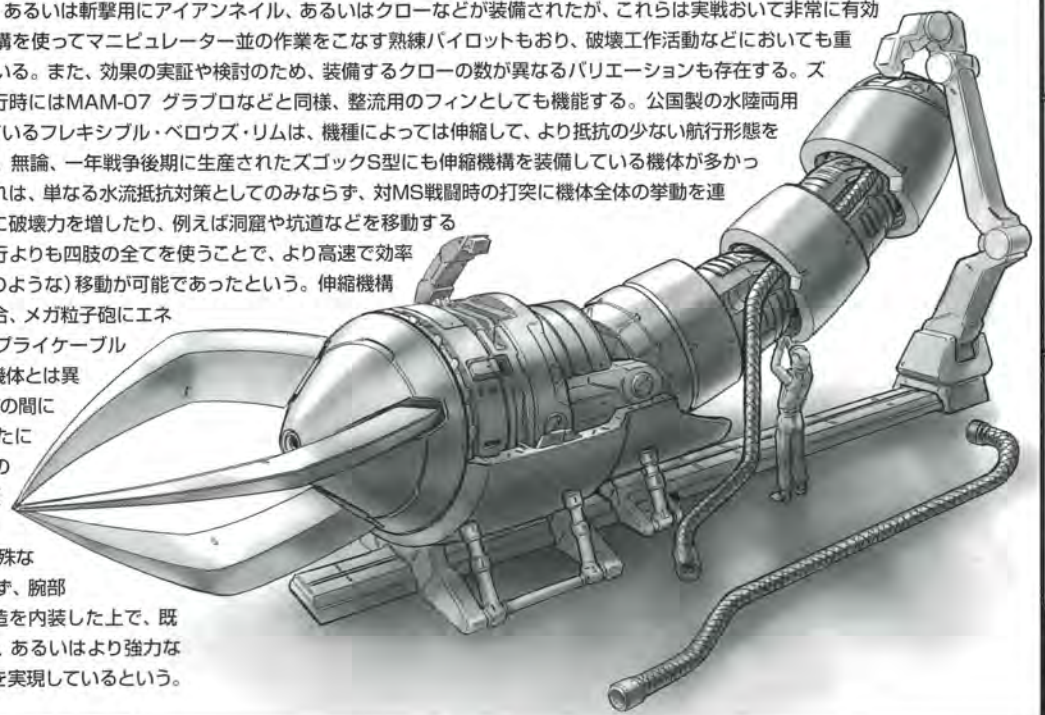
Final Assembly



ARM UNIT

ズゴックの腕部は、“メガ粒子砲を内蔵し、環状の装甲に覆られた柔軟な可動肢”だが、S型とされる機体の多くは、そのことをさらに追及した構造を採用していると言われている。

ズゴックは標準装備として両腕部にメガ粒子砲を内蔵しており、使い勝手を飛躍的に向上させている。また、先端部のクローは近接戦闘には武装として機能する。ズゴックをはじめとする水陸両用MSは、機体運用の問題からオプション兵装の携行が困難であった。そのため、斬撃武装の代替案として打突、あるいは斬撃用にアイアンネイル、あるいはクローなどが装備されたが、これらは実戦において非常に有効に機能した。開閉機構を使ってマニピュレーター並の作業をこなす熟練パイロットもおり、破壊工作活動などにおいても重宝されたと言われている。また、効果の実証や検討のため、装備するクローの数異なるバリエーションも存在する。ズゴックのものは、航行時にはMAM-07 グラブロなどと同様、整流用のフィンとしても機能する。公国製の水陸両用MSの特徴ともなっているフレキシブル・ベロウス・リムは、機種によっては伸縮して、より抵抗の少ない航行形態をとれるものもあった。無論、一年戦争後期に生産されたズゴックS型にも伸縮機構を装備している機体が多かったとされている。それは、単なる水流抵抗対策としてのみならず、対MS戦闘時の打突に機体全体の挙動を連動させることでさらに破壊力を増したり、例えば洞窟や坑道などを移動する際に、単なる二脚歩行よりも四肢の全てを使うことで、より高速で効率的な（一説には“猿”のような）移動が可能であったという。伸縮機構を採用した機体の場合、メガ粒子砲にエネルギーを供給するサブライケーブルの取り回しが既存の機体とは異なり、フレームと外装の間に一對のケーブルが新たに敷設されている。このケーブル自体が耐圧構造と伸縮機構を併せ持っており、他に特殊な水密装備を必要とせず、腕部フレームも、この構造を内装した上で、既存の機体と同程度か、あるいはより強力なトルクとレスポンスを実現しているという。

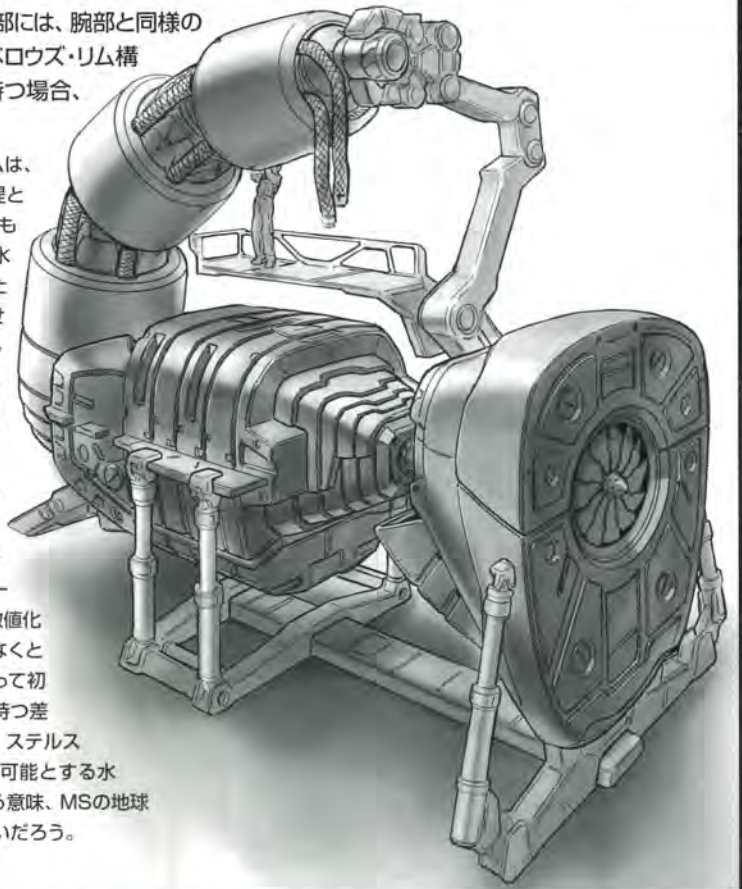


LEG UNIT

ズゴックの脚部には、腕部と同様のフレキシブル・ベロウス・リム構造が採用されている。そして、腕部が伸縮機構を持つ場合、脚部にも同等の機能が求められる。

S型の多くが採用しているフレキシブル・ベロウス・リムは、腕部に採用してあるものと同等のものを採用するのが前提とされており、例えば腕部が伸縮機構を持っていれば、脚部も伸縮機構を持つものが採用される。これは、ズゴックが水中を航行する際の水圧制御ソフトなどの必要から派生した要請ではあったが、前述した“機体全体の挙動を連動させる”ことで、対MS戦闘時の打突などにおいて破壊力を増したりすることが可能であったことと無関係ではない。例えば、熟練者が腕部、脚部に伸縮機構を持つS型の機体を使用すれば、敵機を貫く事が可能であるといわれており、そうでなければ、クローの全長よりも長い穴を敵機に穿つ事など不可能だと言うのだ。無論、ボディの可動範囲やトルク、レスポンスがいいに越したことはない。

真偽の程は定かではないが、単なる自動車のハンドルでも“遊び”が必要であったり、鉄鋼の圧延工程をオートメーション化するにあたり、熟練技術者の“勘”や“見切り”の数値化が必要であったのと似たようなものなのだろう。そうでなくとも、離脱や突貫などで高速移動の際、脚部の伸縮によって初期加速を得られるか否かは、戦闘において十分な意味を持つ差異であることは言うまでもない。かくしてズゴックS型は、ステルス性が求められたMSM-04 アッガイなどの連携さえも可能とする水陸両用機というカテゴリーにおける万能機となった。ある意味、MSの地球環境への適応進化の究極であったと言っても過言ではないだろう。



Parts Name

Parts List

Body Unit

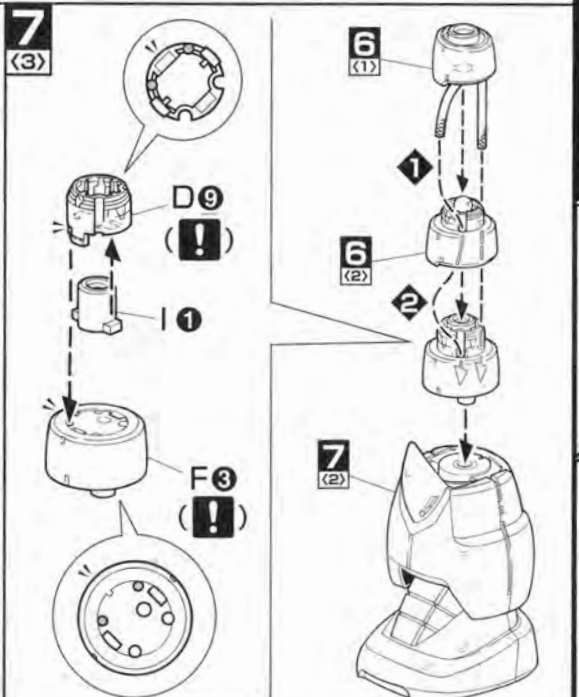
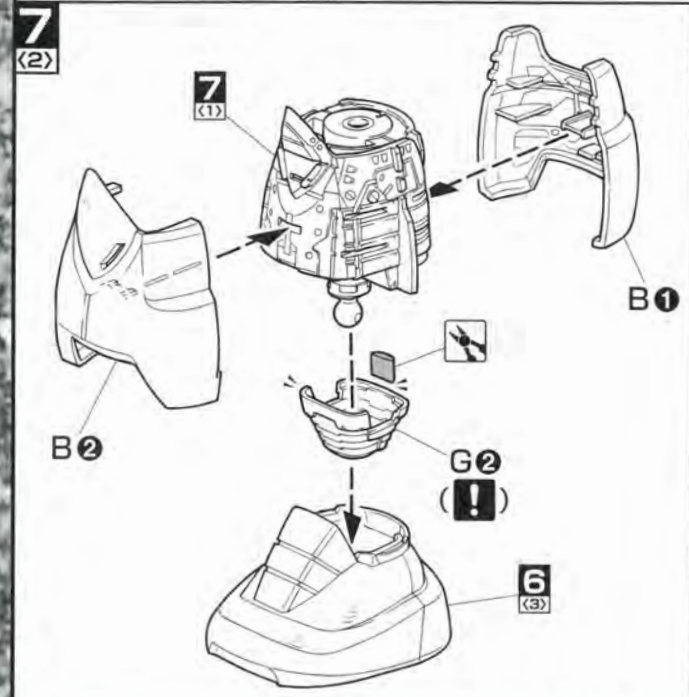
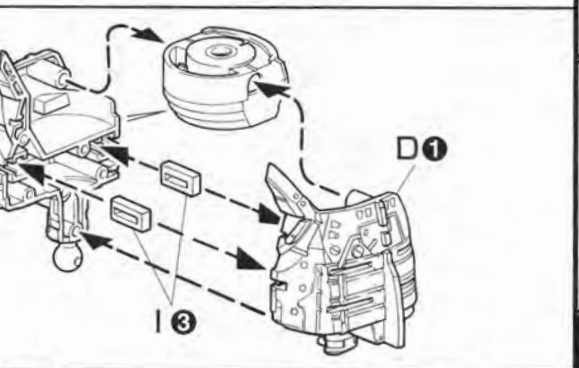
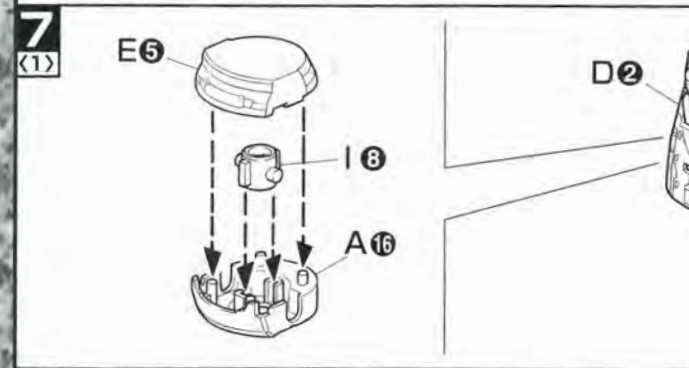
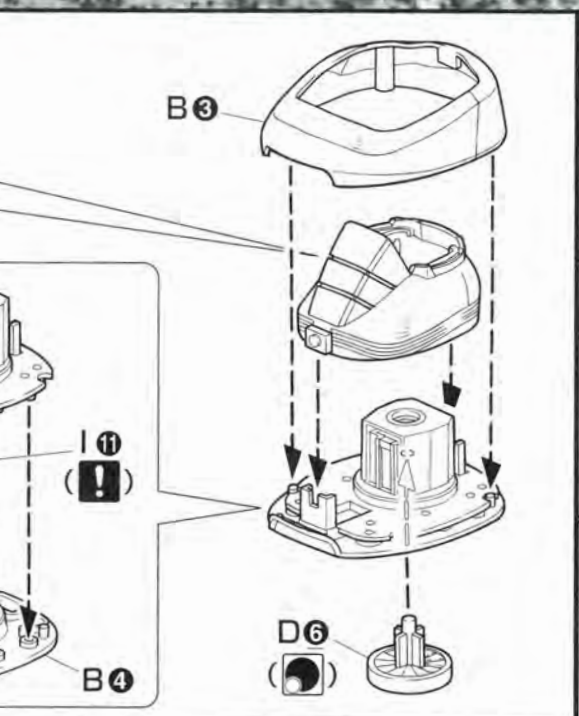
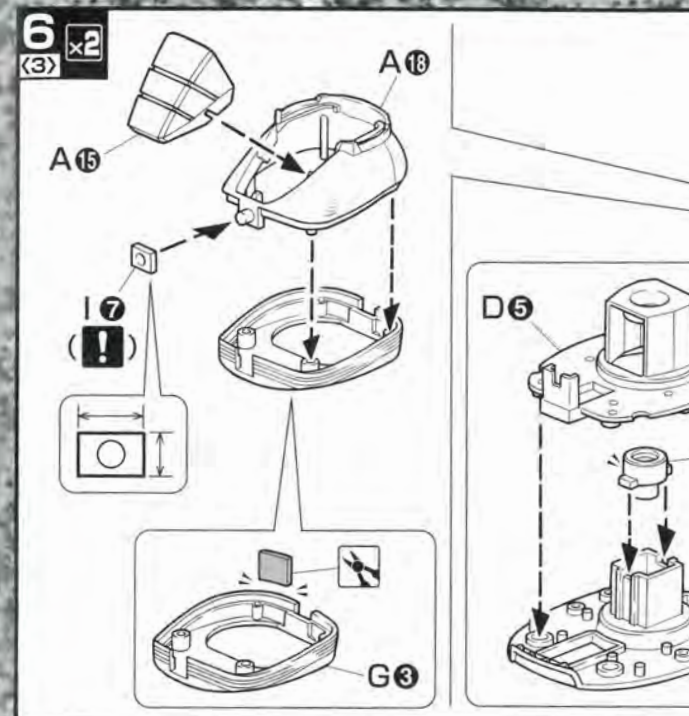
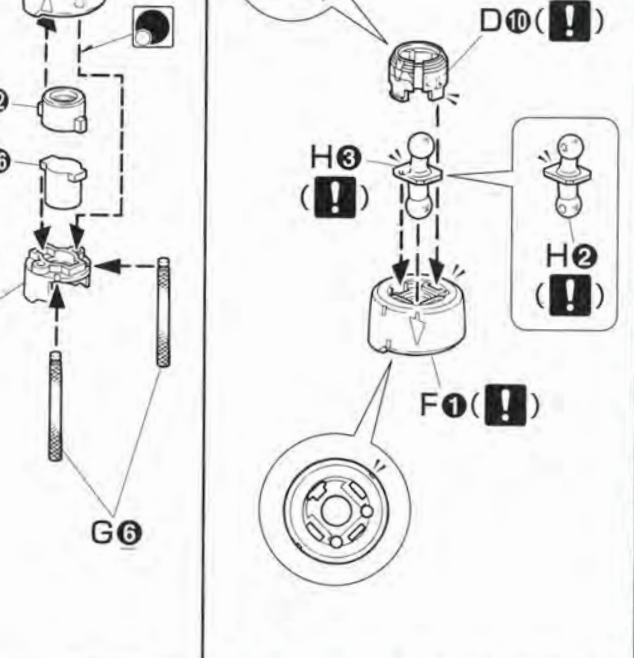
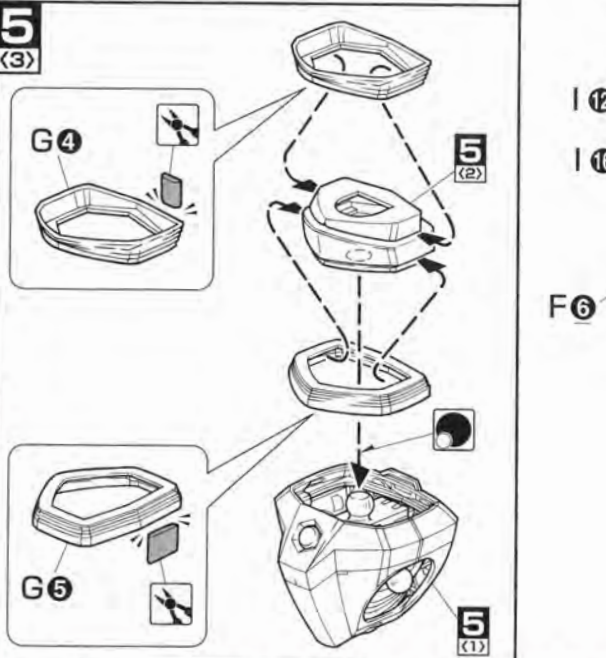
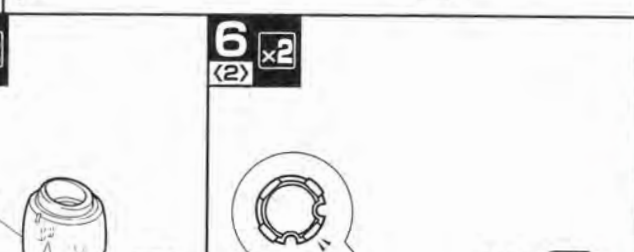
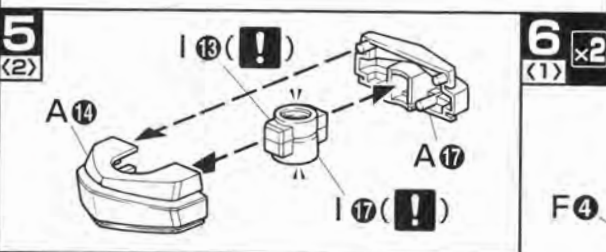
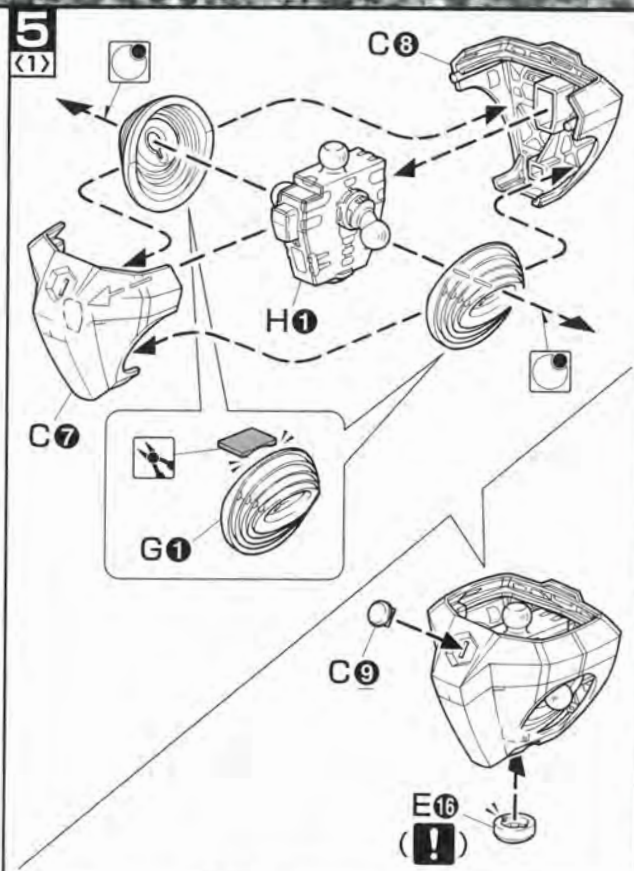
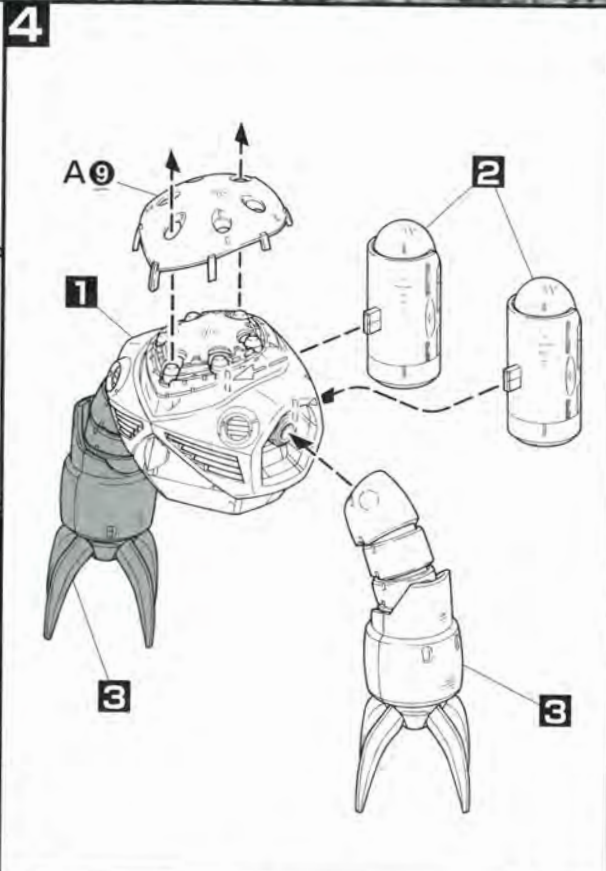
Arm Unit

Leg Unit

Back Pack

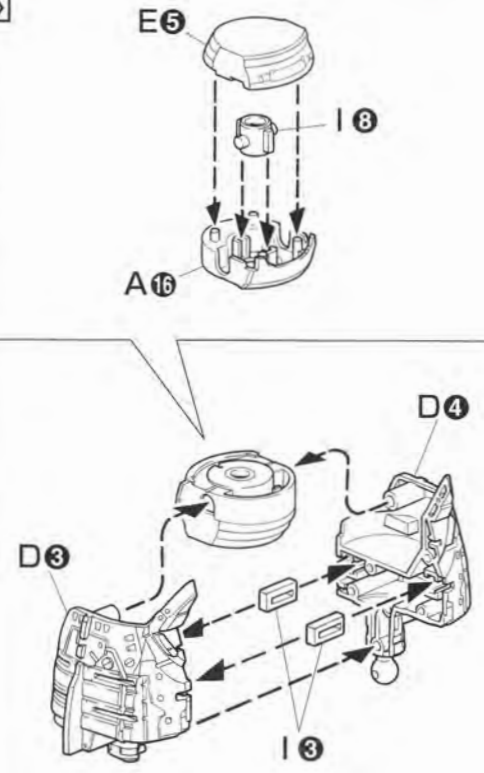
Final Assembly

Parts Name
Parts List
Body Unit
Arm Unit
Leg Unit
Back Pack
Final Assemble

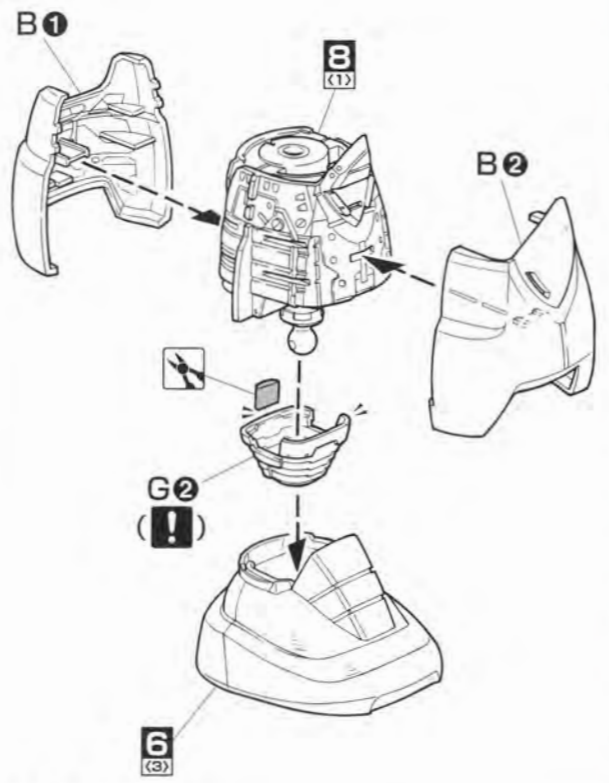


Parts Name
Parts List
Body Unit
Arm Unit
Leg Unit
Back Pack
Final Assemble

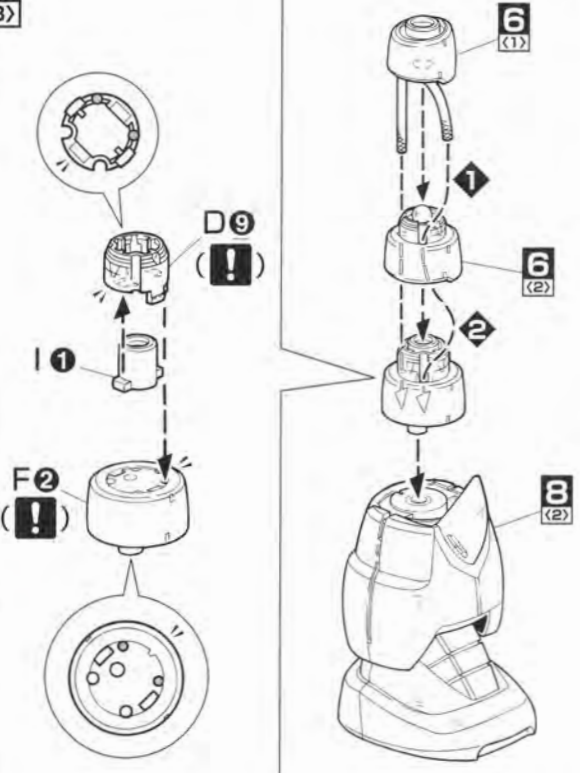
8
(1)



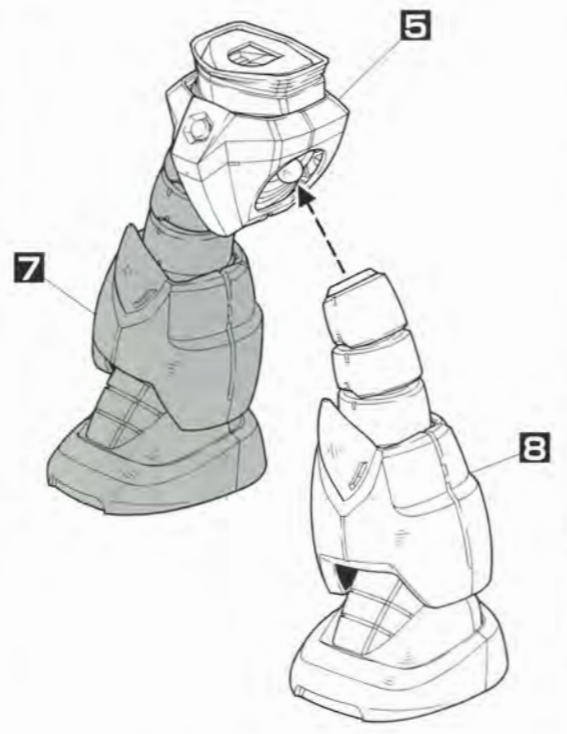
8
(2)



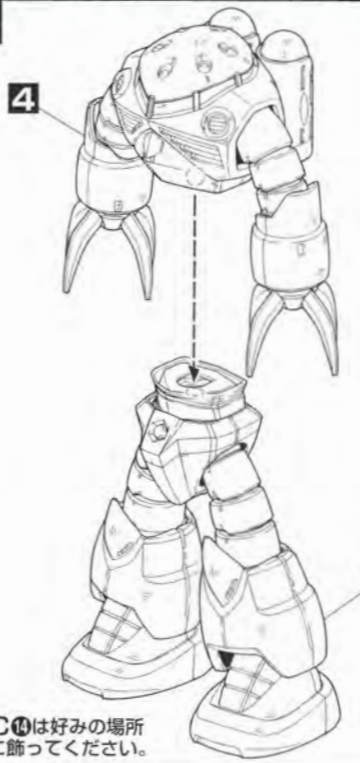
9
(3)



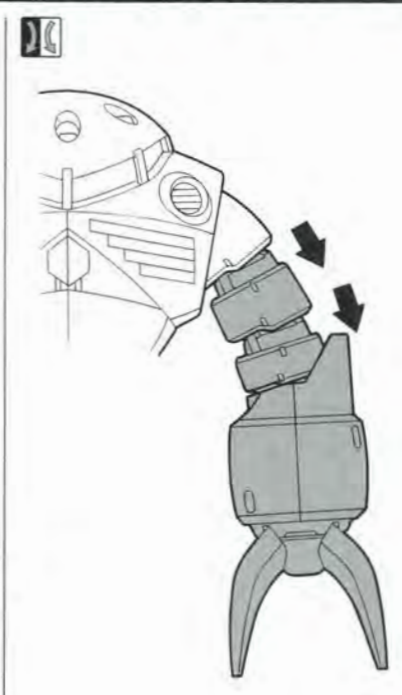
9



10



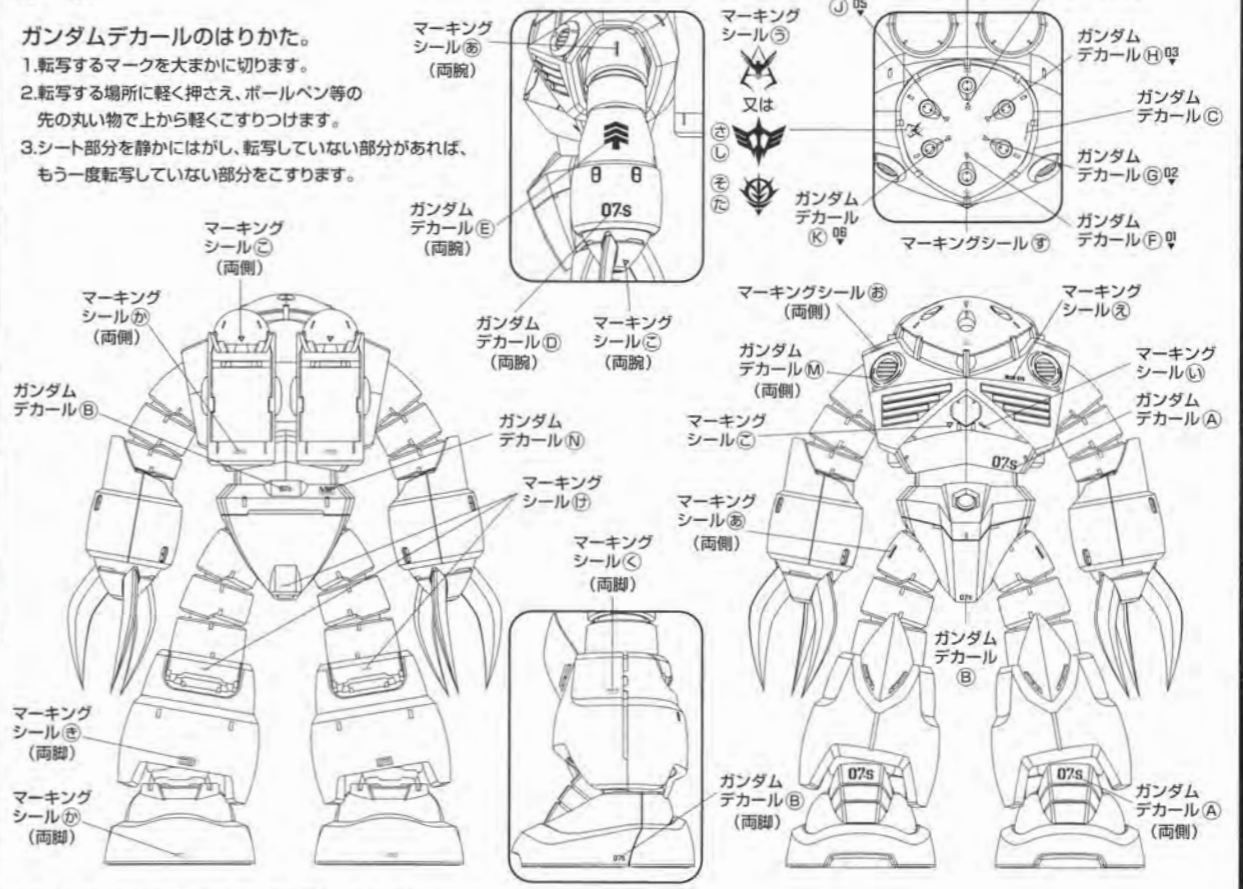
※ C10は好みの場所に飾ってください。



Seal
(シール)

下の図を見て、ガンダムデカールやシールの貼る位置を確認してください。

ガンダムデカールの貼りかた。
1.転写するマークをだまかに切ります。
2.転写する場所に軽く押さえ、ボールペン等の先の丸い物で上から軽くこすりつけます。
3.シート部分を静かにはがし、転写していない部分があれば、もう一度転写していない部分をこすります。



※余ったマーキングシールやガンダムデカールは好きな所にはってください。